

「御船寄」

大分県中津市

“御船寄”とは、江戸時代、中津藩の御座船が係留されていたと伝えられている港で、その“御船寄”の跡は、閩無浜神社の西側、万葉集にも歌われた閩無浜の西端に位置し、現在でも、中津川の河口近くの小さな港として漁船が舫っている。その小さな港の中津川側の出入り口の南側には、かつての“御船寄”当時と思われる玉石積み石垣が荒れ果てながら、わずかに遺されている。



「扇城名勝図」のうち「龍渚」（1800年頃）作者：片山九畹

中津は、黒田氏、細川氏、小笠原氏、奥平氏と続いた城下町で、最後の奥平氏は享保2年（1717）中津10万石に封ぜられ、明治の廃藩置県まで続いた。

その城下町中津が歴史に登場するのは、天正15年（1587）黒田孝高（のち如水）が、豊臣秀吉に豊前の6郡を与えられ、山国川の河口デルタである中津の地を選び、翌年築城を始めたことによる。軍事的にも西に山国川、南から東にかけては山国川の分流大家川が流れ（のち細川忠興は、大家川を金谷堤によってせきとめ、もとの大家川の流路を外堀とした）、北には周防灘を控えた要害の地であった。孝高は、さらに海中に海からの侵入を防ぐために乱杭石を並べたと伝えられている。周防灘に面した中津市を含む旧豊前国一帯は、瀬戸内海を挟んで畿内と結ばれ九州の表玄関として古代から栄えた交通の要所であった。その瀬戸内海に面していることは、交易のほか畿内の情報をいち早く知ることが可能で、ひそかに天下を狙っていたと云われる孝高は、大坂などの畿内の情報伝達のための早船を、大坂・鞆津・上関に配置し、3日で中津に達するようにしたと云う。

交易や情報伝達に欠かせない港は、江戸時代、中津周辺には、上毛部（現在の福岡県築上郡吉富町など）の高浜御番所前の入り江の“京泊”、中津城下の堀川の“運上場”と下正路浦の“御船寄”又は“御船入れ”（以下“御船寄”と呼ぶ。）、下毛郡の“今津浦”、そして現在宇佐市域の“布津部浦”と奥平藩時代は中津領には含まれていない“中須賀浦”があった。

これらの港のうち下正路の“御船寄”には、藩政時代、藩船「朝陽丸」（藩主参勤の御座船）やこれに随行する御用船が係留されていた。

みどころ



- 福沢諭吉旧居：福沢諭吉が安政元年（1854）19歳の時、蘭学を志して長崎に遊学するまでの幼少青年期を過ごした家で、庭に建つ土蔵は諭吉自身が改造し、その二階で勉学に励んだところです。☎ 0979-25-0063
- 中津城：黒田孝高が豊臣秀吉の命により九州を平定し、中津16万石を拝領して天正16年（1588）、中津川河口周防灘に臨むこの城を築く。中津城は別名「扇城」といい、本丸石垣、内堀は当時のままで水門より海水が入って潮の満干で水が増減する水城である。☎ 0979-22-3651